『眼病に効く温泉』

奥沢　康正　著

本書は長年眼科領域の医学史研究を続けてこられた奥沢氏の手になる、眼病治療のための温泉案内書である。著者によると、現在「目の湯」として宣伝している温泉は数カ所しかないという。「目の湯」は、かつてトラコーマをはじめとする流行性眼病の患者が押しかけたために、むしろ二次感染の危険も大きく、温泉による眼病治療を禁ずる自治体もあって急速に衰退したのだそうだ。

このような状況の中、眼科医である著者があえて眼病治療のための湯治を勧めるのはなぜなのか。抗生剤の普及した現代、眼疾患はかつてのような流行性眼病よりも、様々なストレスによってもたらされる眼精疲労によるものが多い。したがって治療は「目が疲れている」という状態を改善することが必要であり、そのために温泉を利用した自然療法を見直そうというのが著者の主張なのである。湯治場では入浴して全身をリラックスさせる他、温泉に浸したタオルで目を覆う「温熱療法」や、まぶたを閉じたまま三分間、三回温浴する方法を勧めている。

さて、本書の構成であるが、Ⅰで温泉が過去の歴史のなかで、どのように眼病治療に利用されていたのかを説き、Ⅱでは著者が所蔵する近代の温泉絵はがきの紹介（画像は添付のCD―ROMに収録されている）、Ⅲで自らの足で集めた全国の眼病に効く温泉の情報を、各温泉ごとに様々なエピソードをまじえつつ綴る。最終章Ⅳは、温泉別の参考資料一覧となっている。

Ⅰの眼病治療という側面から温泉史を論じた部分は、従来温泉史研究そのものに研究蓄積が少ない中で、貴重な研究といえよう。この歴史に関する記述は、Ⅱの絵はがきの画像によってさらに豊かなものになっており、かつての近代日本の、ゆったりとした湯治文化を視覚的に確認することができる。ちなみにこのCD―ROMは、パソコン操作によって眼精疲労が進まないようにという著者の配慮だろうか、画像の背景に、美しい日本歌曲の独唱が流れるようになっている。

Ⅲでは、こういった歴史的な温泉の現況を知ることができるわけである。著者はすでに廃業となった温泉や、そもそも営業化もされていない〝小さな穴〟同然の温泉まで踏破していて、その精力的な調査活動には改めて敬服させられる。聞き取り調査における、著者と現地の人々とのやりとりも、地方の温泉場の雰囲気が伝わってきてまた楽しい。著者が言う温泉の癒し効果には、地元の人とのこのようなふれあいも含まれるのかもしれない。

最後に一言付け加えるならば、正直言ってパソコンに向かっていちいち画面操作をしながら画像を見るのは、昔気質の私には少々面倒な作業だった。しかしながら、この価格の書籍でこれだけ多くの写真を見ることができるということは、やはりありがたい。医学史関連図版の専門書も、これからは本書のようにCD―ROM化することで、価格的に入手しやすいものにできるのかもしれない。その意味で、今後の医学

史図書出版のあり方を示唆する書でもある。

（鈴木　則子）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、二〇〇四年三月、A五判、七四頁、本体価格二五〇〇円〕

壬生町歴史民俗資料館

『みぶ蘭学人（らんがくびと）あらわる』

徳川将軍の日光参詣に使われた日光道中壬生通りをもつ栃木県壬生町では、約十年にわたって町立歴史民俗資料館が中心となって、蘭学を学び奨励した人々も歩いたこの道を軸に、郷土の先覚者の息吹を新しくほり起こしてきた。このたびそれらの事績をまとめてパンフレット「みぶ蘭学人あらわる」を刊行した。

二十二頁の小冊子ながら藩主と学問、西洋医学の導入者・斎藤玄昌、壬生の解剖、種痘実施の医人、蘭学通りの名医たちなど、医史にかかわる史実がコンパクトにもりこまれ、非常に有益な出版物となっている。

（中西　淳朗）

〔壬生町歴史民俗資料館、〒三二一―〇二二五　栃木県壬生町本丸一―八―三三、電話〇二八二―八二―八五四四、一冊・二〇〇円、送料は三冊まで一八〇円、現金書留もしくは郵便振替で申込〕

日本学校保健会　編

『日本学校保健会八十年史』

学校保健の淵源は明治三十一年の勅令「全国の公立学校に学校医を置く」にある。明治初期にはコレラ、天然痘等の伝染病予防、学校設備の衛生、生徒らの休退学、病弱化の防止、後期にいたり学校衛生顧問の活動、学校清潔法、学校伝染病予防、身体検査、学校医などの諸規定が公布され学校衛生の基礎が確立された。この間、最も功績のあったのは、明治二十四年文部省学校衛生事項取調嘱託に命ぜられた三島通良である。明治三十六年に雑誌「学校衛生」が創刊されている。

大正期となり、同二年に大日本学校衛生協会が結成され「日本学校衛生」を機関誌として創刊し、学校衛生の啓蒙に供した。また、この年には第一回学校衛生協議会を開催し、学校衛生の組織的活動基盤を確立した。

本書では明治大正期については略述されており、掘り下げて検索するときには学制発布百年を記念して発刊された「学校保健百年史」（昭和四七年刊）に拠らねばならない。

大正九年に大日本衛生協会を母体として帝国学校衛生会が発展的に誕生した。敗戦後の昭和二十一年には日本学校衛生会となり、同二十九年に日本学校保健会となり、この